

社会科

高田 真光

1 社会科における他者とともに編む子供とは

主体的に知識を獲得していく中で、子供が自ら「発言したい」「考えたい」などと思う社会的事象や他者の考えと出合い、他者と関わり、考えを広げたり深めたりする姿。

これまでの実践から、子供が学習課題に対して調べ学習を行い、自分の考えを構築していく中で、自分の知識や考えとは異なる資料や他者の考えと出合うことで、子供たちは揺らぎ、他者を求めるようになっていった。その関わりを通して、社会的事象に対する理解や考えを広げたり深めたりしていく。このように、揺らぎを出発点として他者と関わり、自身の考えを広げたり深めたりする過程が「他者とともに編む」子供の姿だと捉えた。

揺らぎが生じるためには、どのような社会的事象や他者の考えに出合うのか、いつ出合うのかが重要になってくる。例えば、3年生社会科「火事からくらしを守る」の学習では、消防に対する知識を獲得していく中で、「消防士と消防団員の違いは何だろう」という疑問が子供から生まれ、それぞれの視点から調べ学習を行った。その中で、専門性はあるものの、どちらも消防において重要な役割を果たしていることを理解していった。そこで、消防団員のみが企業からサービスを受けられる事実に出合うことで「えっ…」「ちょっとまって…」「でも、それって…」と考えが揺らいでいった。つまり、自ら課題を生み出し、課題解決に向けて知識を蓄積している段階で、自分の考えとのズレを感じる資料や考えに出合うことで、子供は揺らぐのである。

揺らぎが生じた後、資料や社会的事実から情報を収集したり既習内容や生活経験から類推したりする場面や、学習課題に対して資料等を根拠に話し合う場面での他者との関わりが重要となってくる。これらの場面では、子供は自分の考えをもとに、友達考えに共感したり批判したりしながら自分の考えを見直し、再構築していく。ここで重要となってくるのが、その子らしい社会的な見方・考え方を引き出すことである。考えの背景を知ることにより、子供同士の関わり方は大きく変化していくだろう。子供が考えの根拠を述べるができるように、教師が働きかけることも必要となってくる。そして、このような他者との関わりは、子供の社会的事象に対する認識を広げたり深めたりすることができると思う。

2 社会科における「他者とともに編む」子供を育てるには

① 追究に適した環境づくり(「他者とともに編む」を支える前提へのアプローチ)

子供が主体的に学習に取り組むことによって、考えに揺らぎが生じ、他者とともに編むことにつながっていくと考える。子供が主体的に学ぶためには、子供の発言や疑問から学習問題や学習課題がつくられていくとともに、問題や課題を追究できる環境づくりが重要となってくる。どれだけ疑問が生まれたとしても、それを調べ、新たな知識を獲得したり考えを再構築したりすることができなければ、子供は学習問題や学習課題に本気で取り組むことはなく、それ故に、他者と関わる必要性も感じないだろう。子供が「知りたい」と思ったときに知ることができる環境をつくるのが重要であり、「知ることができた」という経験が子供の主体性をさらに強化していくことになる。教師は、社会科見学等をあらかじめ計画し子供が必要感を感じるだろうと予想される時に設定するとともに、発達段階に応じた資料(文献やサイト)を収集しておき、子供が「知りたい」「調べたい」と思ったときにいつでも追究できるように環境を整えておく必要がある。

② 子供が発言したくなるような場や資料を設定する(個人の内面へのアプローチ)

授業が進んでいくことで、子供一人一人はその子らしい社会的な見方・考え方を働かせながら知識を獲得していき、社会的事象に対する自分なりの考えを構築していく。子供が社会的な見方・考え方を働かせるとき、そこには既習内容の他に、主体的に獲得した知識や生活経験から類推した考え等が関わってくる。これまでの知識や経験から生み出された考えは、子供にとっては少なからず自信のあるものだったり、他者に共感してほしいものだったりするため、子供は「自分の考えを聞いてほしい」「発言したい」などという思いをもつようになる。教師は、そのタイミングを見計らい、話し合いの場を設けることが重要である。話し合いの場を設けることで、それぞれが自分の考えを述べるだけでなく、他者の考えを受容したり共感したりするだろう。それにより、それぞれの考えは再構築され、より高次の考えへと至ると考えられる。

また、子供の考えの背景を理解し、子供が自分事として捉えやすい教材や資料を準備することも、子供

の考えを広げたり深めたりするために重要となる。3年生社会科「工場で働く人とわたしたちの暮らし」では「鱒の寿司」を扱ったり、「火事から暮らしを守る」では「消防団員応援の店」を扱ったりすることがこれにあたる。子供が経験したことのあるものや、子供が住む地域に根付いているもの、子供の生活に関わっているものを教材として、深く追究していく。その過程で、子供がまだ知らなかった事実や子供の考えとはズレが生じる資料を提供することによって、子供は揺らぎ、他者を求め話し合い、考えを再構築していこう。

③ **子供の見方・考え方がより働く、教師の問いかけや話し合いの工夫を行う(他者との関わりへのアプローチ)**

話し合いでは、子供の考えの中にそれぞれの視点や根拠が表出されることで、互いに考えが揺らぎ、再構築されていく。しかし、子供が発言するときには考えだけが述べられ、その考えに至った根拠が語られないことがある。そこで、教師は、子供の考えの根拠となる資料や生活経験を引き出すために問いかけたり既習内容の掲示物を作成して根拠を提示しやすくしたりする必要がある。そうすることによって、同じ考えでも根拠が異なる子供が発言したり、根拠となる資料から別の考えを構築した子供が反論したりして、子供たちの考えが繋がっていくだろう。これが「他者とともに編む」子供の様相である。つまり、教師は、ファシリテーターとしての役割に専念し、子供の発言や思考を繋ぎながら話し合いを進めたり、子供の社会的な見方・考え方を引き出す問いかけを行ったりすることが重要だと考える。